

# 印西市蒸第1遺跡

— 主要地方道佐倉印西線(印西市山田)事業埋蔵文化財調査報告書 —

印  
西  
市  
蒸  
第  
1  
遺  
跡

平成30年3月

千葉県教育委員会

千葉県教育委員会



いん ざい し むれ だい いち い せき  
**印西市蒸第1遺跡**

— 主要地方道佐倉印西線(印西市山田)事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —







## 序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第28集として、主要地方道佐倉印西線（印西市山田）事業に伴って実施した印西市蒸第1遺跡の発掘調査報告書です。歩道整備工事のための狹長な調査区ではありましたが、調査によって古代の竪穴住居跡や土坑等が検出され、周囲に当時の集落が広がっていたことが判明しました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成30年3月

千葉県教育委員会

文化財課長 萩原恭一





## 凡　例

1 本書は、千葉県土整備部印旛土木事務所による主要地方道佐倉印西線（印西市山田）事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

　　蒸第1遺跡　印西市山田字蒸3516-4ほか（遺跡コード231-026）

3 発掘調査及び報告書作成に至る整理作業は千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。

4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者は以下のとおりである。

　　平成29年度

　　千葉県教育庁教育振興部文化財課

　　文化財課長　萩原恭一

　　発掘調査班長　山田貴久

　　担当者　上席文化財主事　黒沢崇

　　実施期間　（発掘調査）平成29年10月5日～10月20日

　　（整理作業）平成29年11月1日～12月28日

5 本書の執筆・編集は黒沢が行った。

6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県土整備部道路環境課、同印旛土木事務所、印西市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

7 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。

8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

　　第1・2図　印西市発行　1/2,500　都市計画基本図　平成28年を編集

　　第3図　国土地理院発行　1/25,000　地形図「成田」「酒々井」「佐倉」「小林」平成22年を編集

9 土器等の一覧表に記載した色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2007年版』に基づいている。

10 図版1の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和49年撮影のものを使用した。

11 遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーンなどの用例は以下のとおりである。挿図中の「K」は搅乱の略である。また、胎土に繊維が含まれる土器片には断面図に●を付けた。



山紗・粘土



焼　土



赤　彩



黒色處理



須恵器断面



## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 事業の経緯と調査の概要.....	1
第2節 遺跡の位置と周辺遺跡.....	4
第2章 検出遺構と出土遺物.....	6
第1節 検出遺構.....	6
第2節 出土遺物.....	8
第3章 総括.....	11
報告書抄録.....	卷末

## 挿図目次

第1図 事業範囲と遺跡位置図.....	2	第4図 検出遺構.....	7
第2図 調査区と遺構分布図.....	3	第5図 出土遺物.....	9
第3図 周辺の遺跡.....	5	第6図 周辺の地形と調査成果.....	11

## 表目次

第1表 土器観察表.....	10	第2表 土製品等計測表.....	10
----------------	----	------------------	----

## 図版目次

図版1 航空写真 (S=1/10,000)	図版3 検出遺構
図版2 調査前・調査状況・トレンチ	図版4 出土遺物

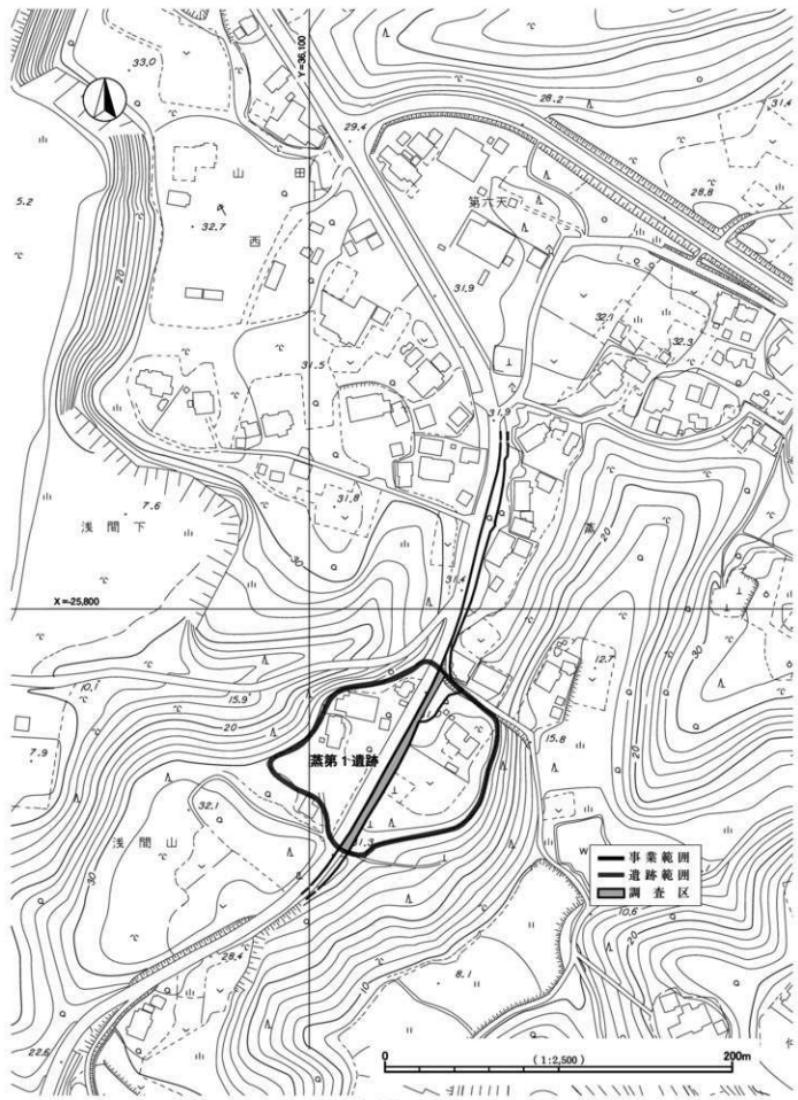
# 第1章 はじめに

## 第1節 事業の経緯と調査の概要（第1図）

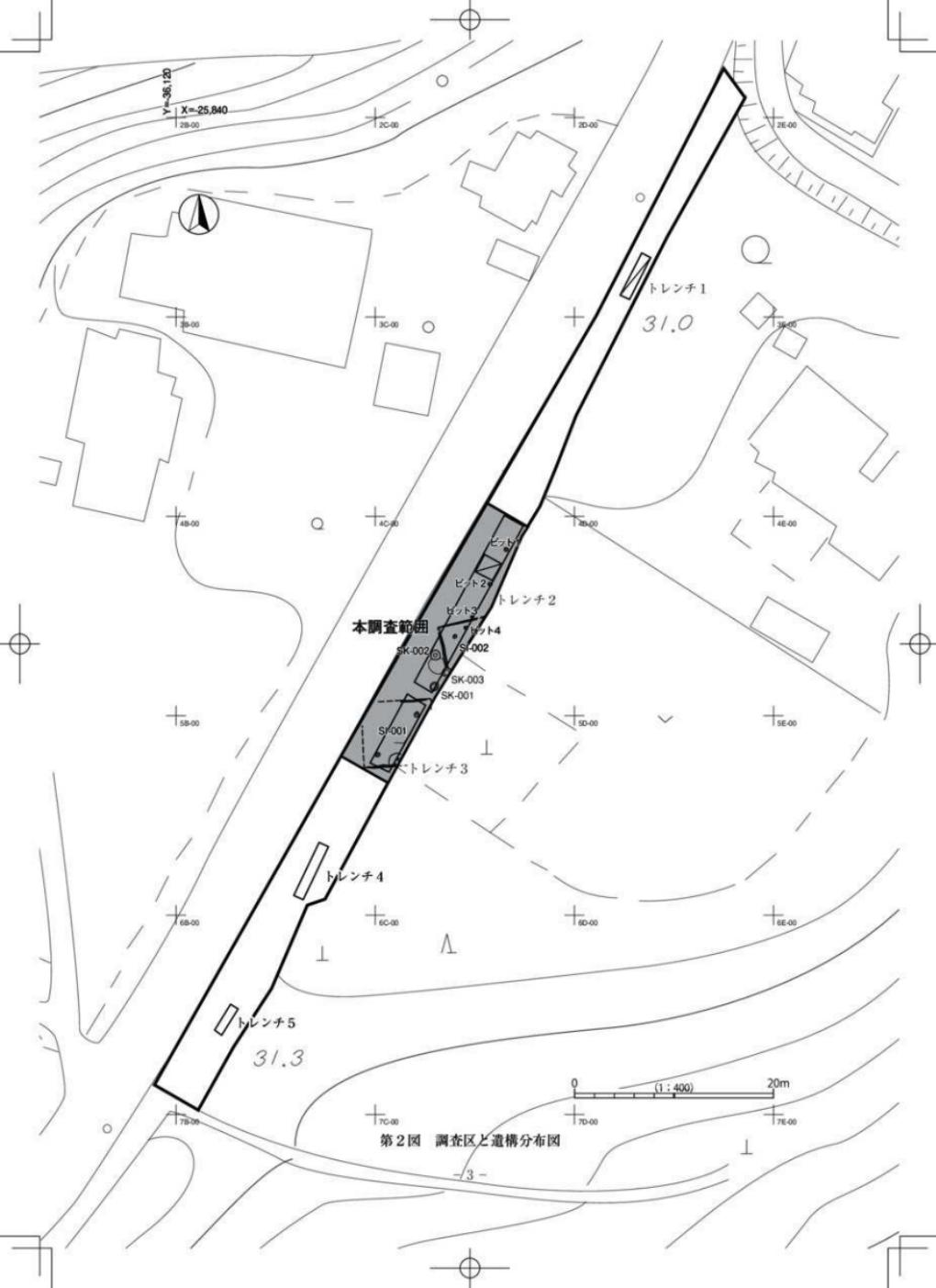
県道佐倉印西線は、佐倉市神門から印西市竹袋までの主要地方道で、近年、千葉ニュータウン等の地域開発により急激に交通量が増加している路線の一つとなっている。そのため、交通安全事業として、特に歩行者の交通事故防止に重点が置かれ、交通環境の改善が必要な部分について歩道整備の拡充が行われている。印西市山田地先においても、歩道の未整備な部分について歩道整備工事が計画され、平成22年9月に千葉県印旛地域整備センター（現：千葉県印旛土木事務所）から「埋蔵文化財の取扱いについて」の協議文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査・試掘等の結果を踏まえ、工事予定路線内には3遺跡（蒸第1遺跡・山田諏訪遺跡・浅間山遺跡）が所在する旨の回答を行っている。そして、今回、蒸第1遺跡範囲内の現道東側の歩道整備工事が実施される見通しとなり、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず、記録保存の措置を講ずることとなった。なお、現道西側の歩道整備工事については、今のところ予定されていない。

遺跡の発掘調査は、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施することになり、平成29年10月に発掘調査、引き続き12月まで整理作業を行い、この度報告書刊行となった。

**発掘調査** 発掘調査に当たっては、公共座標（日本測地系）に基づくグリッド設定を行った。現道西側を含め、遺跡内の事業範囲をカバーするように、 $X=-25.820$ 、 $Y=36.100$ を起点に $20\text{ m} \times 20\text{ m}$ の方眼網を設定し大グリッドとした。名称は北から南へ1・2・3…、西から東にA・B・C…とした。大グリッドをそれぞれ $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ の小グリッドに100等分し、北西隅を00、南東隅を99とした。グリッド名はそれらを組み合わせ3C-97等と表記することとした。調査区（面積464.2m<sup>2</sup>）は、東隣に民地のある北区、周囲より約1m高い畠地と墓地の中央区、南側に緩やかに傾斜する南区に現地形上分けられる。上層の確認調査は、北区と南区については交通量の非常に多い現道と同じ高さであったため、安全面・土砂置き場のスペースの関係から1m幅のトレンチを設定し、北から1トレンチ～5トレンチ（面積70m<sup>2</sup>）とした。北区に設定した1トレンチでは砂利混じりの現表土を取り除くとハードローム層となり、遺構は検出されなかった。遺物は現表土層から近代以降と考えられる捕鉢破片が2点出土した。中央区には2トレンチ・3トレンチを設定した。ピットと堅穴住居跡・土坑が検出されたため、安全面に考慮しながら遺構の広がる部分を最大限拡張し、本調査範囲（面積120m<sup>2</sup>）とした。遺構確認面は現道より高く、遺跡を縱断する県道は台地中央部を深く削平して建設されたことが確認された。遺構の名称は堅穴住居跡をSI、土坑をSK、溝状遺構をSDと略号で表記し、種類毎に通し番号をつけて遺構番号とした。遺物は遺構毎に通し番号をつけて取り上げた。南区には4・5トレンチを設定した。東側の台地の高い部分をごく一部含むが、現道に対し急斜面であり、切土は危険であったため、台地の裾部から南側にトレンチを設定した。どちらのトレンチも道路を建設した際に地山は削平され、碎石や砂が70cm～1mの厚みで埋め戻されていることが判明した。その下は砂や粘土を含む黄褐色土（砂）層であった。遺構は検出されず、4トレンチの表土層から土師器小片が4点出土した。なお、記録方法は従来からの手実測による平板測量・断面実測で実施した。下層の確認調査は、1トレンチをそのまま50cm掘り下げ、やや白みのある黄褐色のローム層を掘り抜いてややざらついた砂混じりの層まで確認したが、石器の出土はなかった。2トレンチの上



第1図 事業範囲と遺跡位置図



第2図 調査区と遺構分布図



層遺構の存在しない部分に2m×2mのグリッドを1か所設定し、X層まで掘り下げたが、こちらからも石器の出土がなかったため、確認調査（面積8m<sup>2</sup>）で終了した。

**整理作業** 報告書作成に当たり、発掘調査で付けた遺構番号をそのまま使用した。整理作業は現場図面・写真の記録整理を行い、トレース原図の作成・写真図版用写真の選出をした。出土遺物は水洗・注記作業を行った後、遺構毎に種別・器種分類をしてから接合・復元作業を実施し、実測・拓本作業後、掲載遺物をデジタルカメラにより撮影した。遺構・遺物のトレース、挿図・写真図版作成及び編集作業について、全てデジタル化し原稿作成を行った。また、編集作業と並行し、分類基準に則して記録類や遺物の収納作業を実施した。

## 第2節 遺跡の位置と周辺遺跡（第3図）

蒸第1遺跡は旧印旛村山田地区の西側に位置し、北印旛沼と西印旛沼の間を西側から東側へ大きく張り出す台地のほぼ中央部に立地する。台地平坦部は標高約31mで、現況は宅地・墓地・畑地・山林で、中央部を南北に県道佐倉印西線が通る。台地西側には2つに分かれた印旛沼を直線的に結ぶ印旛捷水路が人工的に掘削されているが、本来は西印旛沼に面する谷津が深く北側に入り込んでいた部分である。

第3図は印旛沼中央部に位置する台地を中心とした、本遺跡の主な時代である古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡分布図である。▲は古墳時代（後期）の遺跡、■は奈良・平安時代の遺跡、●は古墳時代（後期）～奈良・平安時代の遺跡を示す<sup>注1)</sup>。これらの分布から印旛沼に面した台地上は、古墳時代～奈良・平安時代にかけての遺跡が多数あり、台地中央部から東部先端部にかけて特に密集していることが分かる。また、台地の付け根に当たる西部の内陸部では遺跡の分布が少なく、古墳時代までの集落遺跡はほとんどが台地縁辺部に立地している。印旛沼に張り出すこの半島状の地形に多くの集落が立地していたということは、漁獵や肥沃な土地での生業に限らず、水上交通の要衝の地として、水運を利用した他地域との交易も活発に行われていたからであろう。

発掘調査が実施された主な遺跡<sup>注2)</sup>を見ると、東部の平賀地区の油作第1遺跡では古墳時代後期から奈良・平安時代の堅穴住居跡が50軒以上検出され、古墳時代後期の堅穴住居跡からは鉄滓が多く出土した。油作第2遺跡は古墳時代後期から平安時代にかけて継続する集落跡で、遺構は堅穴住居跡100軒以上、掘立柱建物跡30棟が検出された。駒込遺跡では古墳時代後期の堅穴住居跡59軒を検出した。平賀地区北部では平賀細町遺跡と細町遺跡で古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が調査された。遺構密度は濃く、堅穴住居跡から畿内産土師器や皇朝十二銭の富寿神寶が出土した。台地中央部の山田地区では、村道山田平賀線建設に伴い、山田諏訪遺跡・打手第2遺跡・山田虎ノ作遺跡・光明寺遺跡で、古墳時代後期や奈良・平安時代の集落の一部が調査された。特に打手第2遺跡は古墳時代後期～10世紀にかけての継続的な集落跡で、遺構密度も濃く、当時の山田地区の拠点的な集落であった可能性が高い。

注1) 千葉県遺跡分布地図(1997)千葉県教育委員会「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－」を元に作成した。古墳時代の遺跡については、古墳時代(前期)という時期表記がなされたものは除外した。

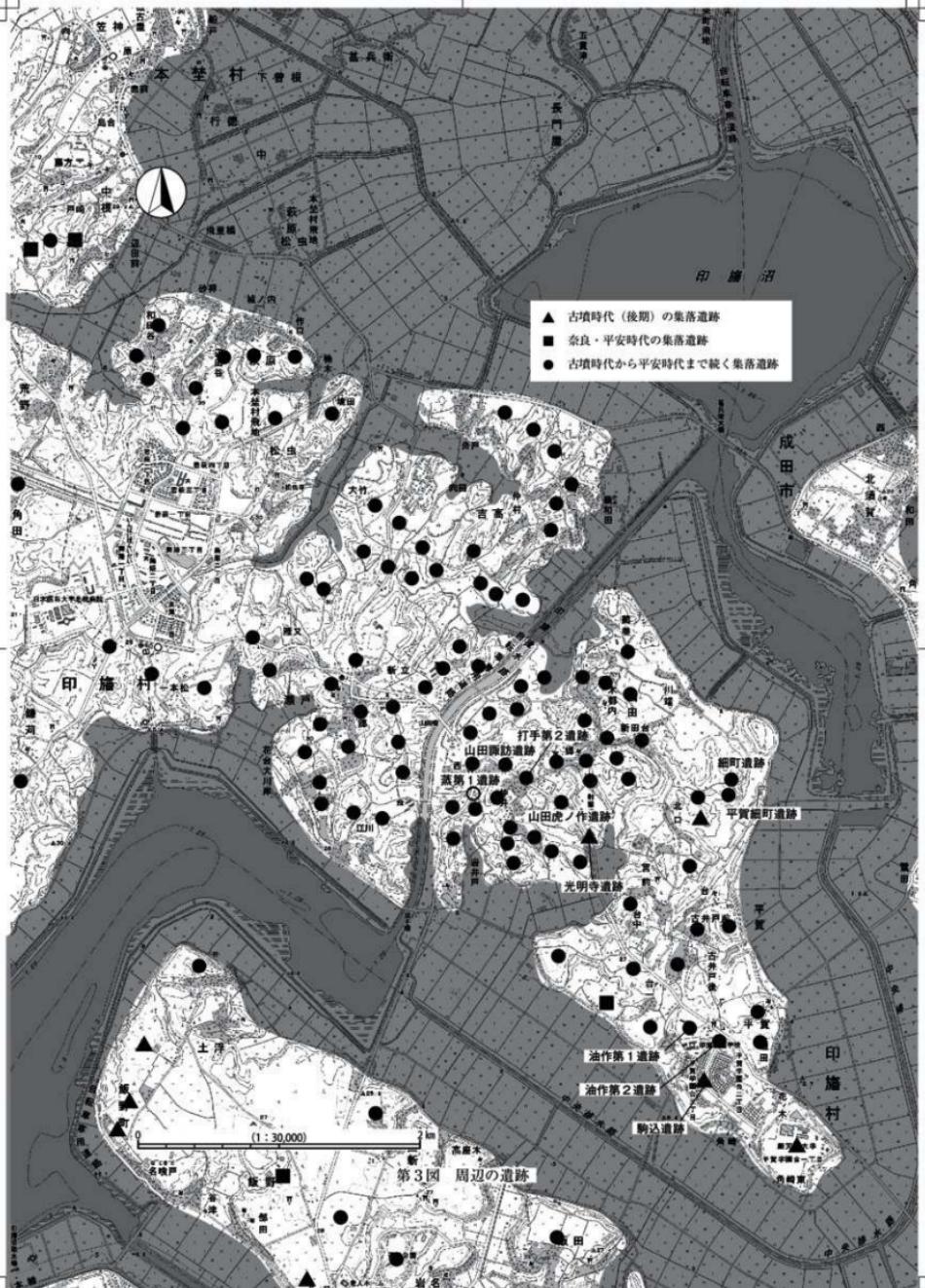
注2) 1985『平賀 平賀遺跡群発掘調査報告書』平賀遺跡群発掘調査会

1991『油作第1遺跡発掘調査報告書』(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第57集

1994『印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書』(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第81集

1996『平賀細町遺跡』(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第114集

2010『細町遺跡 天神道路』(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第290集





## 第2章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 検出遺構（第4図、図版2・3）

遺構は調査区の中央部、畠地と墓地部分のみで検出された。耕作によりソフトロームはほとんど遺存していない状況であったが、堅穴住居跡2軒、土坑3基、ピット4基を検出することができた。出土土器から遺構の時期は古墳時代後期から奈良・平安時代と考えられる。縄文時代早期の土器片も出土しているが、調査区内では遺構は検出されなかった。

**SI-001** 5C-01 グリッドに位置する。全体の30%程度を調査区内で精査した。平面形は方形で、規模は推定一辻6.8mと大形、深さは確認面から20cmである。主軸方位はほぼ南北である。床面は平らで、壁溝が巡る。北東・南西側の主柱穴を2基検出した。主柱穴の掘方平面形は、方形に近く、しっかりととした掘込み（深さ：67cm）である。南壁際中央部に当たる部分の床上10cmから焼土がまとまって出土した。焼土は硬化はしておらず、取り除くとその下から周囲を10cmほど緩やかに掘りくぼめた出入口ピット（深さ：60cm）が検出された。床面には炉は見つからず、北壁付近の覆土中に白色の砂が確認できたため、おそらく、北壁にカマドが付設されていたものと考えられる。

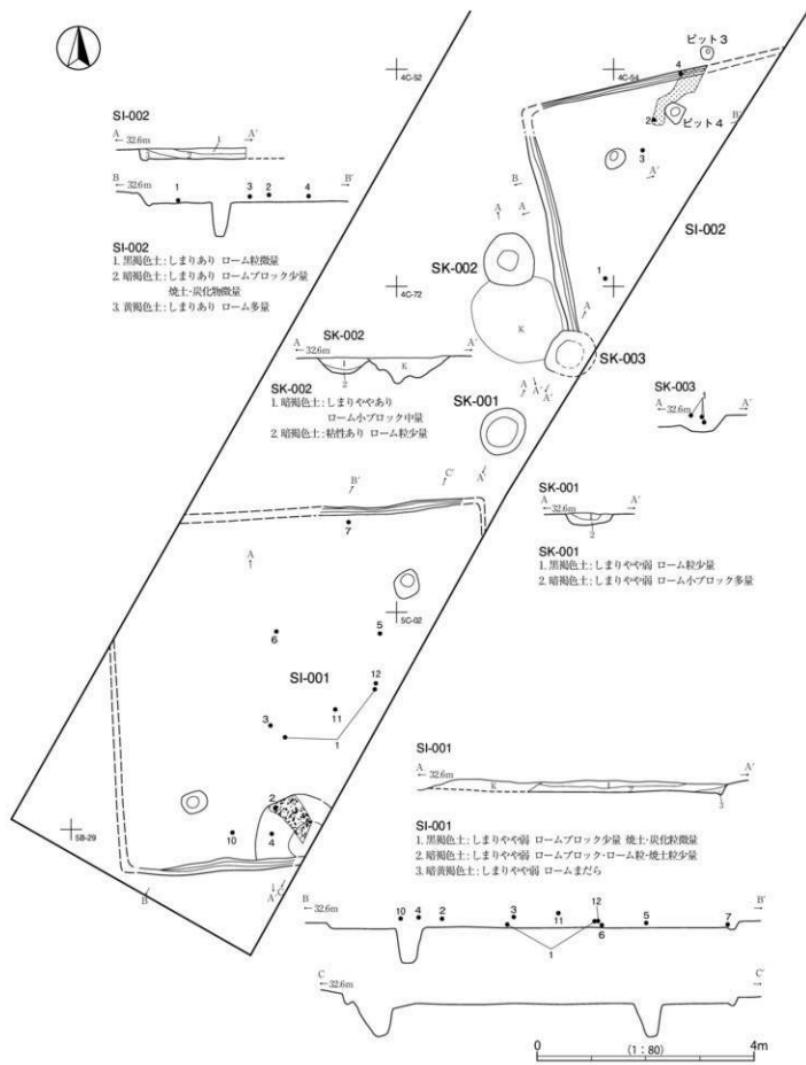
**SI-002** 4C-64 グリッドに位置する。全体の20%程度を調査区内で精査した。畠作による搅乱のため、特に北西隅部分の平面形の確認が困難であった。平面形は方形で、規模は推定で一辻6.0m、深さは確認面から20cmである。主軸方位はN-11°-Wである。床面はほぼ平らで、壁溝が巡る。北西側の主柱穴を1基（深さ：63cm）検出した。遺存は不良だが、北壁際でカマドの左袖部を検出した。壁への掘込みは確認できなかった。カマド構築材（砂）を除去すると、壁溝の続ぎが検出された。カマド下周辺にはピット3・4があるが、堅穴住居に伴う可能性は低いと考えられる。

**SK-001** 4C-82 グリッドで、SI-001とSI-002の間に位置する。平面形はほぼ円形で、径90cm、確認面からの深さは22cmである。覆土は自然堆積と考えられ、底面は平らである。出土遺物は土師器小片が2点で、実測可能な個体はない。いずれもロクロ整形ではない杯の破片で、1点は赤彩される。

**SK-002** 4C-62 グリッドで、SI-002のすぐ西側に位置する。南側の一部が搅乱を受けていた。平面形はいびつな円形で径90cm、確認面からの深さは30cmである。覆土は自然堆積と考えられ、底面は皿状に丸みをもつ。

**SK-003** 4C-73 グリッドに位置するが、半分以上は調査区外である。SI-002と重複し、こちらがおそらく新しい。北側の一部が搅乱を受けていた。平面形は円形と考えられ、推定径90cm、確認面からの深さは30cmである。底面は平らである。

**ピット** 本調査区北側で4基のピットが検出された。北側からピット1・2・3・4と呼称した。等間隔ではなく、深さも一定しないため、調査区外を含めて1つの遺構とするか判断する必要がある。覆土はしまりのある暗褐色土で、ロームブロックが少量含まれる。掘込み（ピット1・2：深さ36cm、ピット3：深さ40cm、ピット4：深さ60cm）はしっかりとしている。遺物は土師器片がピット1から2点、ピット2から4点出土した。土師器片は薄手であり、奈良時代以降の可能性が高いと考えられる。ピット4はSI-001のカマドの一部を壊しており、こちらが新しい。



#### 第4図 検出構造



## 第2節 出土遺物（第5図、第1・2表、図版4）

狹長な調査区で堅穴住居跡全体を完掘できず、また、烟作等により遺構覆土の遺存が不良で、遺物の出土量は全体的に少量（天箱2箱分）であった。遺物は主に土器類で、特殊遺物の出土はない。

**SI-001** 出土遺物は土師器破片が主体で、厚みのある壺破片が目立つ。杯類では掲載個体以外ではロクロ土師器はほとんど含まれず、口縁が大きく外反した杯や口縁部の高い須恵器模倣杯の破片が含まれる。須恵器は小片が6点のみである。他には炭化した種子が出土した。ほとんどの個体が床面から浮いて出土しており、7の瓶が押しつぶされるようにして比較的の床面に近い高さで出土した。1～4は土師器杯である。1は口縁部が短く内傾し、内面は細かいラミガキ調整が施される。内外面ともに黒色処理される。2～4はロクロ整形され、体部下端に回転ヘラケズリによるやや広めの面が作られる。2は比較的の遺存がよく、底部厚がある。3は口縁端部が肥厚し、外反気味に立ち上がる。4の底面は回転糸切り離しである。5・6は土師器瓶の口縁部から体部の破片である。5は口縁部下位に内外面共に棱を作り出し、外反しながら立ち上がる。6は全体的に赤く、口縁内面には赤彩が遺存する。7はほぼ完形の土師器瓶である。胴部に僅かに張りがあり、口縁部は緩やかに外反する。外面は横方向のヘラケズリ調整で、全体的に器厚がある。8は腕形のミニチュア土器である。雑な手捏ねによる成形で、器画は赤みを帯びる。9は鉄滓の破片である。他には出土していない。10～12は土玉で、外面はナデ調整である。他にも破片が3点出土した。

**SI-002** 遺物は主に土器小片である。須恵器片は40点で、古墳時代のものと考えられる破片は含まれない。胎土に白色砂粒が目立つ破片が多い。土師器片にはロクロ土師器が少量と須恵器模倣杯が微量、他は壺の胸部破片が多い。1～3は土師器杯である。1は内外面赤彩され、体部から口縁部が丸みをもって立ち上がる。2は内面黒色処理され、底部内面の周囲が沈線状に凹む。胎土は精緻である。3は底部破片である。ロクロ整形で、底面は回転糸切り後、手持ちヘラケズリ調整である。4は土玉である。やや雑なナデ調整で、一部刻み状に圧痕が見られる。

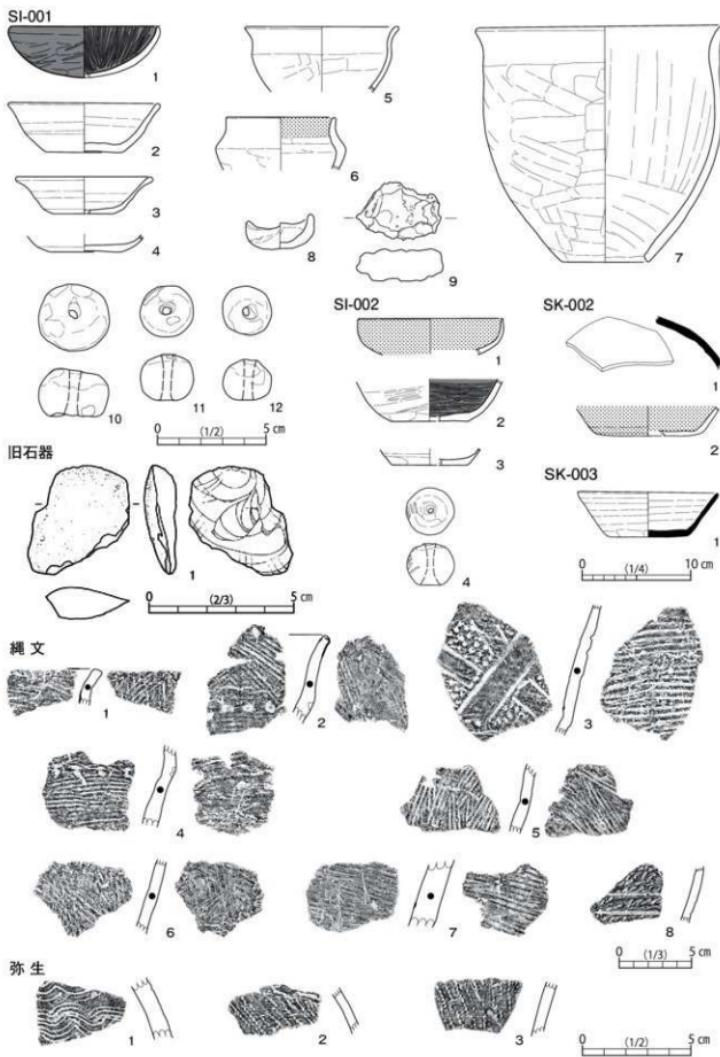
**SK-002** 出土した遺物は土師器及び須恵器の小片である。ロクロ土師器は含まれない。1は覆土上層から出土した須恵器壺類の肩部破片である。胎土は緻密で、シャープな作りである。外面には自然釉が付着する。2は土師器杯の破片である。内外面ともにナデ調整で、赤彩される。

**SK-003** 1は須恵器杯である。胎土には白色砂粒が目立ち、雲母細粒も含まれる。底面は回転ヘラケズリ後手持ちヘラケズリ、体部下端も手持ちヘラケズリ調整である。他に遺物は出土していない。

**旧石器** 1は安山岩製（トロトロ石）の剥片である。下層確認調査時ではなく、堅穴住居跡（SI-001）の精査の際に、覆土中から出土した。原礫面を残した厚みのある剥片で、重量は12.17 gである。他にはチャート製の剥片が出土した。

**縄文土器** 調査区からは約180点の土器片が出土した。ほとんどが早期の条痕文系土器である。1～7は条痕文系土器である。胎土には纖維が含まれ、内外面とも粗く条痕文が施される。3は赤みのある破片で、沈線による斜格子文が施され、区画を刺突文で充填する。2・4は口縁部下位に横位の刺突文が施される。8は後期の土器片である。まばらな縄文の地文に条線が施される。胎土には白色砂粒が目立つ。加曾利B式と考えられる。

**弥生土器** 1～3は弥生時代後期の土器片と考えられる。これら以外で弥生土器はほとんど出土していない。1は壺の頸部破片と考えられる。櫛描文で横走波状文が施される。2・3は壺の破片と考えられる。器壁は薄く、附加条縄文が施される。



第5図 出土遺物

第1表 土器観察表

( ) は推定 ( ) は現存長

造構	No.	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-001	1	土師器	杯	口径 (13.6) 底径 (—) 器高 (47)	35%	微砂粒中量	内面 黒褐 10YR3/1 外面 黒褐 10YR3/1 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ケズリ後ミガキ 焼成 ケズリ後ミガキ	内外面 黒色処理
SI-001	2	土師器	杯	口径 14.0 底径 7.0 器高 4.6	80%	微砂粒多量	内面 (に) ぶい 程 7.5YR7/4 外面 (に) ぶい 程 7.5YR7/4 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 回転ケズリ	器面 ざらつき
SI-001	3	土師器	杯	口径 (12.6) 底径 (5.6) 器高 3.4	30%	白色微砂粒	内面 暗褐 7.5YR4/2 外面 (に) ぶい 程 7.5YR6/4 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 回転ケズリ 焼成 ケズリ	内外面 ざらつき
SI-001	4	土師器	杯	口径 (—) 底径 6.6 器高 (16.1) 100%	微砂粒多量 雲母細粒合	微砂粒多量	内面 黒褐 7.5YR3/1 外面 黒褐 7.5YR3/1 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 回転ケズリ 焼成 ケズリ	器面 ざらつき
SI-001	5	土師器	楕	口径 (14.2) 底径 (—) 器高 (61) 胴部 20%	—	微砂粒少量	内面 黒褐 7.5YR3/1 外面 (に) ぶい 程 5YR5/4 焼成 良好	内面 ハラナデ 外面 ケズリ後ナデ	器面 ざらつき
SI-001	6	土師器	楕	口径 (10.1) 底径 (—) 器高 (49) 胴部 25%	—	微砂粒中量	内面 喷赤褐色 5YR3/3 外面 喷赤褐色 5YR3/3 焼成 良好	内面 ハラナデ 外面 ケズリ後ナデ	被熱 口緑本彩
SI-001	7	土師器	瓶	口径 23.0 底径 8.0 器高 21.8	90%	微砂粒多量 雲母細粒 白色針状物質	内面 橙 5YR6/6 外面 (に) ぶい 程 7.5YR7/4 焼成 良好	内面 ケズリ 外面 ケズリ 焼成 良好	胴部外面 黒接
SI-001	8	ミニチュア 土器	楕形	口径 3.1 底径 (—) 器高 1.5	100%	微砂粒少量	内面 明赤褐色 5YR5/6 外面 明赤褐色 5YR5/6 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 焼成 良好	
SI-002	1	土師器	杯	口径 (13.4) 底径 (—) 器高 (33.3) 胴部 10%	—	微砂粒少量	内面 橙 5YR6/6 外面 橙 5YR6/6 焼成 良好	内面 ハラナデ 外面 不明 焼成 良好	内外面 赤彩
SI-002	2	土師器	杯	口径 (—) 底径 (7.0) 器高 (36)	30%	微砂粒少量 雲母細粒 白色針状物質	内面 黑 10YR2/1 外面 (に) ぶい 程 10YR6/4 焼成 良好	内面 ナデ後ミガキ 外面 ケズリ ミガキ 焼成 良好	内面黑色 焼成 良好 内外面 処理
SI-002	3	土師器	杯	口径 (—) 底径 (7.0) 器高 (15.5)	40%	微砂粒中量	内面 橙 7.5YR6/6 外面 橙 7.5YR6/6 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ケズリ 手持ケズリ 焼成 良好	内外面 手持ケズリ
SK-002	1	須恵器	壺	口径 (—) 底径 (—) 器高 (49)	—	精緻	内面 喷オーリーフ 7.5Y5/2 外面 喷オーリーフ 7.5Y5/2 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	外側 付着
SK-002	2	土師器	杯	口径 (—) 底径 (10.0) 器高 (2.7)	—	体部～底 微砂粒破片	内面 暗赤褐色 25YR4/6 外面 暗赤褐色 25YR4/6 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	内外面 赤彩
SK-003	1	須恵器	杯	口径 12.9 底径 7.4 器高 4.2	60%	白色砂粒 雲母細粒	内面 暗褐 10YR5/1 外面 暗褐 10YR5/1 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 手持ケズリ 焼成 良好	

第2表 土製品等計測表

造構	No.	種類	色調	法量 (mm · g)				備考
				最大長 (括)	幅	厚み	重量	
SI-001	10	土玉	明黄褐 10YR7/6	31.0	32.5	32.0	22.4	
SI-001	11	土玉	褐灰 10YR4/1	23.0	25.0	21.0	12.5	
SI-001	12	土玉	橙 5YR6/6	22.0	22.5	19.0	9.3	
SI-001	9	鉄 淬	黄褐 25YR4/1	27.0	39.0	15.0	9.3	楕形洋の破片
SI-002	4	土玉	に(に) ぶい 程 7.5YR5/4	21.4	22.0	19.0	10.0	



### 第3章 総 括

今回の調査では、主に縄文時代早期条痕文系の土器の出土と古墳時代後期～奈良・平安時代の集落跡の一角が検出された。周囲には縄文時代の炉穴群が展開している可能性があり、調査区周辺の畑地と墓地部分には土師器片が多量に散布していることから、古墳時代後期以降の遺構がまとめて分布していることが想定される。検出した遺構の時期であるか、SI-001では古墳時代後期と9世紀代の土器が出土した。全出土土器の組成、出土量や住居形態から判断して古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。SI-002は遺存の良好な遺物がほとんどなく、古墳時代後期～10世紀前半の土器が含まれており時期の判断が難しい。土坑は遺構の切合いと出土須恵器から8世紀中葉以降である可能性が高い。

蒸第1遺跡の立地する印旛沼の中央部に張り出した台地は、微視的に見ると大小の開析支谷が南北から入り込む非常に複雑な地形であり、現状では西側の印旛捷水路の大規模な水路掘削や道路・宅地造成による削平などで旧地形を更に判り難くさせている。当時の推定谷部と周辺の調査成果<sup>(注1)</sup>を重ねた地形図が第6図である。本遺跡は山田諏訪遺跡・打手第2遺跡と地続きではあるものの西印旛沼へ南に張り出した細長い舌状台地の中央部に当たり、山田諏訪遺跡・打手第2遺跡は北印旛沼からの谷津も入り込んだ台地基部の比較的広い平坦部に分布する。今回は狭長な調査区ではあったが、立地的にも周辺の調査成果を補完して、当時の集落景観を復元するための資料の一つとして評価できる。

注1) 1994年「印旛村道山田平賀郷予定地内埋蔵文化財調査報告書」(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第81集





写 真 図 版

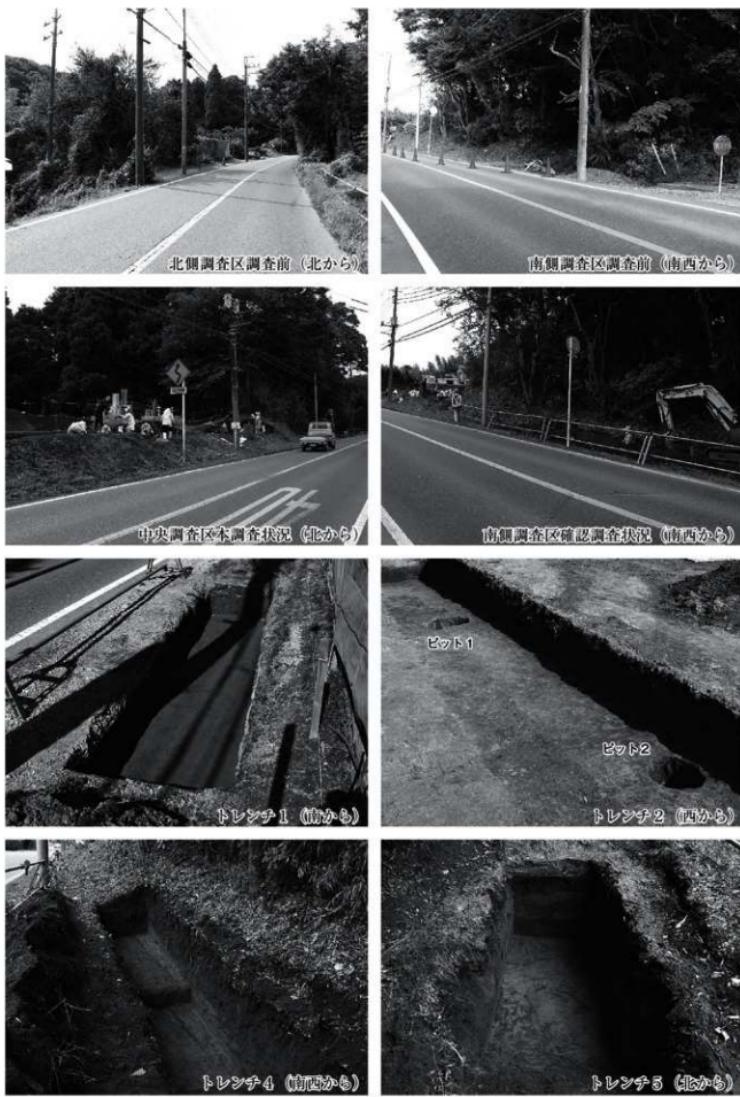


図版 1

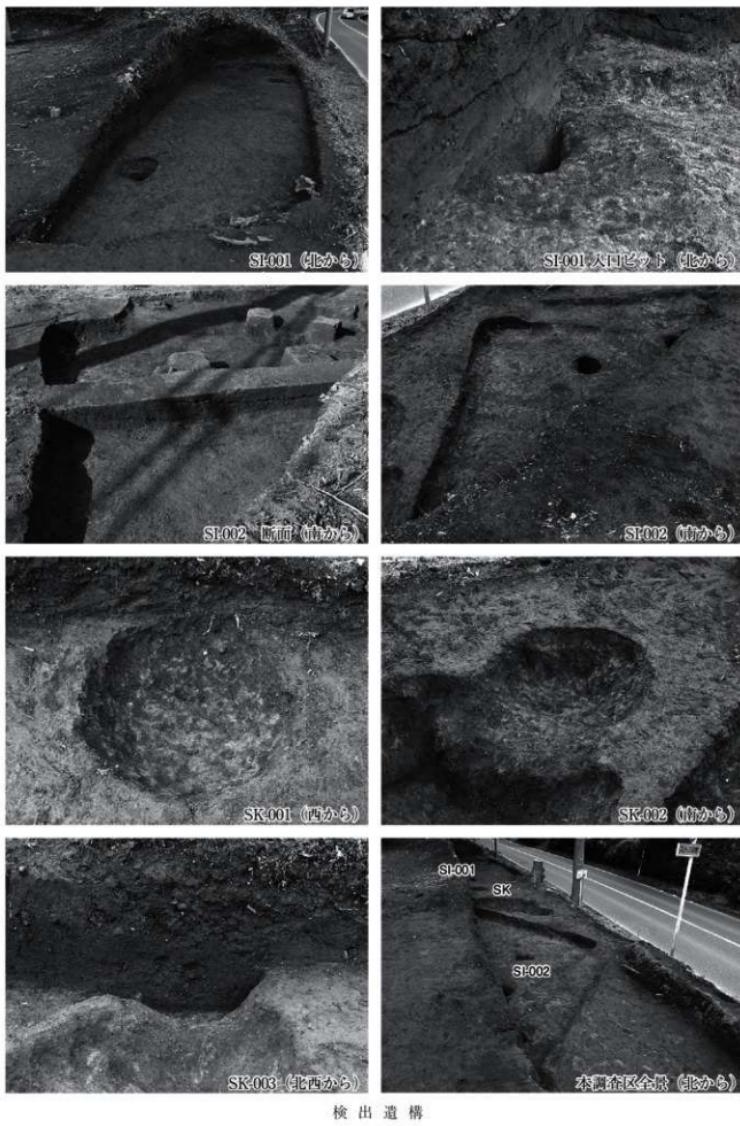
燕第1遺跡

縮尺 1:10,000

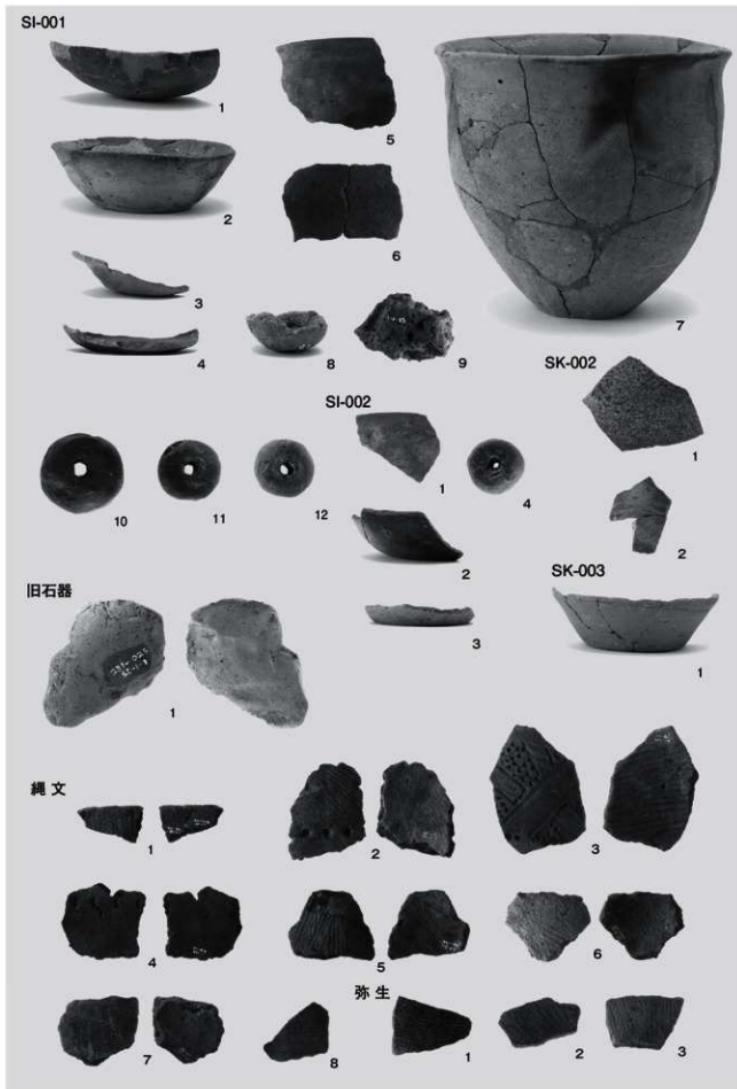
図版2



調査前・調査状況・トレーンチ



図版4



出土遺物

報告書抄録





千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第28集

## 印西市蒸第1遺跡

— 主要地方道佐倉印西線(印西市山田)事業埋蔵文化財調査報告書 —

平成30年3月28日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印 刷

株式会社ライフ

成田市東和田595